

## <研究ノート> 19世紀における戦争形態の変化

横浜市立大学名誉教授 松井道昭

ナポレオン戦争から第一次世界大戦までにおこなわれた主要な戦いはクリミア戦争（1853-56）、南北戦争（1861-65）、デンマーク戦争（1864）、普墺戦争（1866）、普仏戦争（1870-71）、露土戦争（1877-78）、ボア戦争（1899-1902）などである。ナポレオン戦争までと比較しての違いを求めると以下のとおり。

1. **参戦国が少ない**（Cf. 18世紀の戦争）
2. **戦争期間が比較的短い**（Cf. 18世紀 & 20世紀の戦争）

最長が基本的に国内戦争の「**南北戦争**」であり、4年（戦闘被害も甚大）



次期戦争《**参戦国激増・国家総力戦・長期戦**》への警鐘とならなかった

しかし、19世紀の戦争において後の第一次大戦、第二次大戦の予兆が表われていることを見逃してはならない。それはどのような予兆なのか？

### 1. 大量動員

フランス革命以後、フランスが国民皆兵を原則に大量徴兵をおこない列強を相手に大勝利を収めたことから、列強もこれをモデルに徴兵制を採用した。フランス革命時のフランスの動員数は総人口約 2200 万に対して 100 万であった。そのフランスは第一次大戦時には総人口 4000 万に対して 840 万となっている。つまり、動員率は 8 倍ということだ。

### 2. 銃の発達 & 戦術改革

**南北戦争**は第二次産業革命（重工業革命）の最中にあり、①部品交換可能な**小銃の大量生産**の時代に突入。②しかも、**ライフル銃**（線条銃）が発達して射程距離と装填の容易化、故障や欠陥品の極小化により殺傷力は格段に発達。③縦隊→横隊への散開の時間差があると応戦時に味方の被害が大きいため、**散開進軍と遮蔽物に拠って応戦する隊形**をとる。

**普墺戦争**では墺軍が縦隊戦術であったのに対し、普軍は散開戦術をとった。散開戦術とは中隊（約 100 人）縦隊の前方に散兵を配し、その後方に大きく分離した 2 群の小隊縦隊を配置し、さらにその後方に予備隊を配置する方式である。

**普仏戦争**では普軍はさらに濃密な散兵を配した中隊縦隊陣形をとったが、仏軍の優れたシャスポー銃（射程 1000～1200m）の前に甚大な被害を蒙った。仏軍は散兵を配し地形を利用して遮蔽しつつ行動しその応報に縦隊が続行した。かくて、普軍は接近戦を嫌い、仏軍に優越する砲攻撃を優先するようになる。

### 3. 機関銃と後装式旋条砲の出現と築城術の変化

**機関銃**の出現は戦闘方式転換を迫るものだった。しかし、その誕生から実用化まではけっこう時間がかかっている。1851年に出現して実戦投用まで 18 年もかかる。1870年の普仏戦争が最初だが、仏軍のほうにその効用を疑問視する向きが強く — 軍上層部はいつでもどこでも戦法革新は不得手

のようである — 装填訓練を欠き、しかも砲兵隊に配属されたため、それほど用をなさなかった。しかし、普軍への心理的圧力は大きかったようである。

普軍は機関銃「死神の火線」とシャスポー銃では後れをとったが、**後装式旋条砲（クルップ砲）**に拠って遠距離射撃で仏兵を圧倒した。「銃と砲の争い」では普軍に軍配が挙げたのである。大砲の有効射程距離だが、ナポレオン時代の 12 ポンド砲は約 1.5 km であったが、南北戦争時には 2.5 km に、普仏戦争時では 3 km に伸びている。

大砲の発達の最も顕著な影響はヴォーバン式要塞を過去のものにした。堤は軟らかい土のほうが良いとされてきたが、コンクリート製の耐弾要塞でなければもたないことが判明。さらに要塞は地下に潜るようになる。ついには 20 世紀のマジノ要塞線に結実する。

以下、新兵器と出現時期を一覧表にしておく

新兵器	実戦使用	備考
ライフル銃	アメリカ独立戦争（1775-1783）	ライフルは 1400 年代に考案
機関銃	普仏戦争（1870-1871）	仏が発明（370 発／分）
後装式旋条砲	仏墺戦争（1859）	Magenta, Solferino の戦い
有線電信	アメリカ南北戦争（1861-1865）	米 Joseph Henry が実用化
蒸気機関車	仏墺戦争（1859）	—
蒸気軍艦	クリミア戦争（1853-1856）	最初の出現は米フルトン号
スクリュウ推進艦	クリミア戦争	仏海軍 Victoire 号（17 ノット）
潜水艦	露土戦争（1877-1878）	伊軍
鋼鉄製軍艦	アヘン戦争（1842）	英軍フレゲンソン号
魚雷	アメリカ南北戦争（1861-1865）	—
飛行機	伊土戦争（1911-1912）	伊軍が偵察と爆弾投下に使う
戦車	第一次大戦（1914-1918）	英軍がソンム戦線で投入

#### 4. 野戦の変化

普仏戦争当時はまだ野戦会戦主義と要塞防御戦主義が拮抗しており、前者は普軍が、後者を仏軍が採用した。ただ、普軍は、むやみやたらな野戦会戦主義は味方の損傷を覚悟しなければならないとの立場から自軍優位の場合にしかおこなわず、むしろ敵を要塞に追い込み包圍殲滅作戦を好んでとった。だが、大規模要塞の場合は「兵糧攻め」に徹し、敵方の消耗を待つ作戦をとった。**ポーア戦争で初めて鉄条網が出現**し、それが塹壕陣地に張り巡らされると、そこが野戦陣地の様相を呈し、攻める側は容易に踏み込めなくなった。レマルク作「西部戦線異常なし」の状況が生まれる。日本軍は日露戦争の**旅順攻略**で露軍の敷いた鉄条網に遭遇したが、用意がないため苦戦する。

#### 5. 通信革命

**有線電信**は 1830 年に発明されていたが、実戦での採用（南北戦争、1861 年）までには時間がかかった。鉄道線の脇に付設された有線電信は鉄道とともに戦略に革命をもたらした。これでもって戦場から遠く離れた場所からでもシヴィリアン・コントロールのもとで指揮官（大統領）が前線に指示を伝えることができた。こうなると、複数の戦線を一か所で同時に操ることも可能になる。ただし、無線電信は 1894 年に出現し、**実戦で使われたのは日本海海戦**である。

## 6. 鉄道

蒸気機関車の登場は1822年だが、鉄道の敷設に費用と時間がかかることから戦争での利用は1859年の仏墺戦争（イタリア独立のためにフランスがイタリア支援でイタリアに兵員を鉄道で運んだ）のが最初である。これでもって通常なら**2か月はかかる**ところを**わずか11日間**で60万もの大軍を馬匹といっしょに運んだ。あまりの迅速ぶりに対する墺軍は態勢が整わないままに応戦し、初戦で大敗を喫する。ところが、仏軍はこの勝利をもとに徹底的に改良し、次戦のための作戦として練りあげなかった。「**驕り**」のなせるところだ。

一方、プロイセンの**参謀総長モルトケ**は**1857年より参謀本部内に鉄道班**をつくり、索敵・通信方法を研究中であった。つまり、大軍の兵員・馬匹・糧秣・弾薬輸送の方法を考究していた。1859年の仏墺衝突をつぶさに観察して、鉄道に利用価値があるのを認めると、ライン川周辺に幾本もの鉄道線を敷設し、対仏戦争で戦端を開くと同時に相手に先んじて敵地に侵入する作戦を練った。その実験場となったのが、**普墺戦争（1866年）**だが、これに大勝利を収め**〈別名7週間戦争〉**、次戦における大部隊の分進集中の作戦に完ぺきを期した。

## 7. 参謀本部

フランスはナポレオン軍の偉業に縋り軍制改革を怠った。つまり、「**軍は多ければ多いほどよい**」とばかり、大軍の戦場への一挙投入方式に拘りすぎた。大軍になればなるほど指揮系統を緻密かつ柔軟にしなければ、ある個所での剰員と別の箇所での不足という不合理が表出するのは避けられない。ナポレオンはたしかに天才であり、**ワーテルローをふくめ彼が指揮する戦場では最後まで無敗**であった。だが、彼は猜疑心が強く部下指揮官に自由裁量権を与えず、最初に命令したどおりの行動を期待した。このため、戦況、地理、天気のごあいを無視した無謀な野戦に拘ったため、無理と無駄が重なるとともに、敵がナポレオン戦法を真似しはじめると、徐々に自軍の損傷率が高くなる。

一方、プロイセンはイェーナ＝アウエルシュテッツでの大敗北（1806年）から教訓を学びとり、参謀本部を設置してふだんから**作戦研究**を綿密におこない、同時に**前線指揮官と参謀本部員の人事交代制を確立**し、理論と実践の有機的結合をなしとげた。前線指揮官には期間と目標だけを与え、作戦行動上の自由裁量権を与えた。つまり、普軍は「**一人の天才よりも能率的な組織戦！**」を旗標にしたのだ。そして、情報戦の有用性をふまえ、ふだんからの索敵行動はむろん、**偽報攪乱戦術**も駆使することによって策略を重視した。機動性を高めるにはまず**情報伝達速度を高める**ことが肝要とばかり、電信による伝達はむろん、戦場での**騎兵を索敵と戦況伝達、作戦指示のために駆使**した。**地図班**も重視し、ふだんからの地理や戦略地点、倉庫などの状況を調べ、戦闘がおこなわれた場合は戦況再現のためにすぐに図版化を急いだ。これが後の軍事研究の教材として役立つことになる。

参謀本部は匿名機関であり、普仏戦争で大勝利をおさめるまではほとんどの者（普軍内でも）がモルトケ総長を知らなかった。命令は国王（ヴィルヘルム一世）の名で下され、副署にモルトケがサインしていたため、この命令書をみた前線の部下は「**モルトケって、だれ？ 中身はまともだが…**」と語った逸話が残っている。

## 8. 軍編成

19世紀の軍事制度では依然として歩・騎・砲の3兵科が基本である。軍編成もそれ以前と変わらない。中世までは中隊までで間にあったが、オランダ戦争の最中に登場した**マウリッツ**改革で大隊

制度が確立し、その後、18 世紀のフリードリヒ大王（1740-1786）が連隊を編成。その後、仏人プロイ元帥により師団編成が導入された（1760）。ナポレオン時代に軍団が編成されることによってようやく現代の編成ができあがる。

以下は陸軍の編成と指揮官のランクを一覧にしたものである。

- ① 方面軍…兵力 10 万以上で、指揮は元帥 marshal が執る。2 個軍団以上から成る。
- ② 軍団 [注 1] ……兵力 4～6 万で、指揮は大将 general [注 2] が執る。2 個師団以上から成る。
- ③ 師団……兵力 1～2 万で、指揮は中将 lieutenant-general が執る。作戦の基本単位で兵站をはじめ歩・騎・砲の全機能を持ち、独立戦闘能力を有する。少将 sergeant-major-general が指揮を執る。3～4 個連隊から成る。
- ④ 旅団 [注 3] ……兵力 3～5 千で、少将または大佐 colonel が指揮を執る。基本は 2 個連隊から成る。
- ⑤ 連隊……兵力 2～3 千で、大佐が指揮を執る。2 個大隊以上から成る。戦闘に専念するため兵站機能が欠ける。
- ⑥ 大隊……兵力 500～1000 で、中佐 lieutenant-colonel が指揮を執る。2 個中隊以上から成る。
- ⑦ 中隊……兵力 200 名前後で、大尉 captain が指揮を執る。2 個小隊以上から成る。
- ⑧ 小隊……兵力は 30～60 で、中尉 lieutenant または少尉 second-lieutenant が指揮を執る。2 個以上の分隊から成る。
- ⑨ 分隊……兵力は 8～13 で、曹長 sergeant（軍曹）または伍長 corporal が指揮を執る。
- ⑩ 班……兵力は 4～6 で、兵長または一等兵が指揮を執る。

[注 1] ナポレオンは軍団制をとったが、図体が大きく運用上の欠陥があったため、プロイセン軍は軍団制を採用しなかった。

[注 2] 将軍 general は「大将」「中将」「少将」の総称だが、これも国差があり、たとえば、フランスでは少将はいない。

[注 3] 旅団制をとらない場合もある。戦闘では始終損耗著しく師団が崩れ、これを半師団＝旅団ということもある。人数の点で各国まちまちであり、旧日本帝国陸軍では 8 千～1 万 5 千人、米国では 2 万人になる。

(c)Michiaki Matsui 2014